書評

『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』

平井松午編

川名　禎

近年の地理学におけるGISの導入は、高度な統計分析を可能にして相応の成果を挙げてきたといえるが、一方で従来の研究方法や問題関心をも変えたように思われる。そうしたなか歴史地理学の分野において積極的にその可能性を試してきた編者が、歴史地理学の研究におけるGISの有効性を示すために編まれたものが本書である。本書は数年にわたる科学研究費を使用した共同研究「GISを用いた近世城下の解析と時空間データベースの構築」の成果としてまとめられたものであり、歴史地理学や日本史学を専門とする多くの研究者がこれに参加しているが、それぞれの論考は必ずしもGISを利用しているというわけではない。そうした点では本書はGIS分析の方法を提示することよりも、城下町及び近世都市研究そのものに主眼を置いて構想されたものであるともいえるだろう。

一方で、タイトルに「近世城下絵図」が掲げられている点は、これが編者の長年にわたる絵図研究の一貫であることを表すと同時に、数ある史料の中でもGIS分析を可能にする近世測量絵図として城下絵図が採用されたことを示している。つまり本書はGISの利用と城下絵図の研究、そして都市研究といういくつものテーマがクロスオーバーするかたちで構成されているとみることができる。

特にGISを専門としない評者にとっては、従来からの城下町・近世都市研究に対し、どのような新しい展開が示されるのか、大きな期待を抱いて本書を拝読した。本書の構成と執筆者は以下の通りである。

はしがき
序章　近世城下絵図の分析と課題―歴史GISからのアプローチ―（平井松午）
第Ⅰ部　近世城下町の町割と景観
第1章　首里那覇鳥瞰図の年代設定と描かれた景観の虚実（安里　進）
第2章　絵図に見る臼杵城下町の変遷―絵図資料論の観点から―（岡村一幸）
第3章　長府城下町の重層的景観―古代国府・中世府中・近世城下町―（礒永和貴）
第4章　徳島城下町の町割変化―近世城下絵図の比較分析・GIS分析―（平井松午・根津寿夫・塚本章宏・田中耕市）
第5章　尾張犬山城下絵図の系譜とその特徴―十七世紀後期における犬山城下町の空間構造―（山村亜希）
第6章　越後国新発田城下町絵図とそのGIS分析（堀　健

彦・小田匡保・渡部浩二）
第7章　名所図会資料に対する歴史ＧＩＳ分析（長谷川奨悟）
第Ⅱ部　近世城下町の構造と空間変動
第8章　佐賀城下町の空間構成とそのＧＩＳ分析の試み（宮崎良美・出田和久・南出眞助）
第9章　近世後期の佐賀城下町における町屋地区とその変容―竈帳と町絵図を用いたＧＩＳ分析の試み―（同）
第10章　城下町絵図からみた近世和歌山の構造―武家屋敷地域の空間編制とその維持をめぐって―（渡邊秀一）
第11章　水戸城下における十七世紀中頃と十九世紀中頃における禄高別拝領屋敷地の分布（小野寺　淳・田中耕市・永井　博・小橋雄毅）
第12章　明和六年（一七六九）の米沢城下と原方集落における家臣の屋敷配置―ＧＩＳ城下図の分析を通して―（渡辺理絵・角屋由美子・小野寺　淳・小橋雄毅）
第13章　十九世紀末の関東地方南部における天然痘罹患率・死亡率の都市村落間格差（川口　洋）

本書は二部構成をとっており、景観と都市構造にテーマをわけてそれぞれの論考が収められている。本書については既に渡辺康代氏による書評①もあるので、各章の内容を簡単に紹介しながら、評者なりの感想を述べたいと思う。

序章では、城下絵図の分類を示した上で、特に城下屋敷割図に絞ってその位置付けや史料上の性格、分析課題などが挙げられている。ここで武家屋敷に注目する理由が、従来の町人地偏重の城下町研究に対する反省からという訳ではなく、あくまで武家屋敷が城下絵図を用いたＧＩＳ分析に適した対象であるということがわかる。実際に本書では多くの研究が武家屋敷を対象としているのであり、そうした分析を行う上での課題などが具体的に述べられている。特に武家屋敷の居住実態に対する指摘は注目でき、城下絵図を扱う上でも重要な論点になるかと思われる。ここでは、一見すると城下絵図の従来的な使用法が再確認されているに過ぎない印象も受けるのだが、作業の効率化を図る上でもＧＩＳの活用が有効であることは十分に示されている。

第Ⅰ部第1章は、「首里那覇鳥瞰図」と呼ばれる、首里城と那覇の町を定型的に描いた鳥瞰図について集成的な分析を試みたものである。この鳥瞰図はいわゆる城下絵図とは性質が異なるもの、景観描写が詳細で様々な情報が描かれている。著者は同種の鳥瞰図について詳細なデータベースを作成し、絵図に描かれた景観年代をもとに各図の作成年代を推定している。さらに視点の違いから鳥瞰図の形式分類を行い、そのうえで各形式の時間的推移についても検討を加えている。特に評者が興味を感じたのは、十九世紀後半から登場したとされる「首里城鳥瞰図」である。これは単視点で手前に那覇港と上部に首里城を描く構図になっている。残念ながら掲載されたカラー写真が小さく、内容を具に観察できないのであるが、この図では遠方にある首里城が手前の町並みよりもやや大きく描かれる、逆遠近法的な手法が用いられている様に思われる。そうした可能性は、著者がいう正確に描かれた那覇の町と虚構の首里城という対比にも関係してくるのではないだろ

うか。他にも鳥瞰図から都市の実態を読み取る試みがなされるなど、興味深い指摘も多い。

第2章は、臼杵城下町における城下の成立及び変遷について、城下絵図を用いて論じたものである。五〇点近い城下絵図を比較検討し、景観描写や記載内容、作成契機などによりその成立を大きく三期に分類している。城下の変遷や城下絵図の概要が端的にまとめられており非常に参考になるが、評者が一番興味を覚えるのは「寛永臼杵城下絵図」である。著者が指摘するように、慶長国絵図と描写上の共通点を持つこの城下絵図は、「臼杵藩領図・国絵図写」とも関連し、慶長国絵図事業との関わりを考える上でも大変貴重な絵図である。この点については明言を避けた印象を受けるが、明らかに著者の関心が窺われるのであり、可能性として指摘されても良かったのではないだろうか。ところで、臼杵城下に関する研究史として挙げられていないが、評者も臼杵の城下研究を拙稿にまとめている。[2] そこでは景観研究における近世城下絵図の史料的限界についても指摘しているのでご一読願いたい。

第3章は、長府城下町において古代から近世にかけての「重層的景観」を検討したものである。長府は古代には長門国府が置かれ、中世の府中を経て近世城下町へと役割を変えていったが、各時代の痕跡を景観から辿る試みがなされている。ここでは地籍図を国土基本図に復原する伝統的な歴史地理学の手法により、中世と近世とで異なる地割走向の存在が明らかにされている。但し、同一箇所において異なる地割の向きが混在するのではなく、檀具川を隔てた南北で異なっているとのことであり、それぞれ海岸線の方向なども異なることから、二つの地割方向をどこまで各時代の特徴として見ることができるのかやや疑問も残った。特に中世においては埋没地割を含めた検討も必要ではないだろうか。

第4章は、徳島城下町を対象に城下絵図の比較分析及びGIS分析を行ったものである。前半は徳島城下の変遷が、領国構造のあり方や寛永期の都市再編と共に綴られている。次いで正保城絵図の分析を元に城下町の確立期の問題についての指摘がなされている。後半は、徳島城下の「城下屋敷割絵図」のリスト化と各図の検討が加えられ、GIS化の対象となる絵図が選定される。そして、GIS化の手続きが示された後に土地利用の分析がなされる。GIS化の利点は定量化できる点にあるが、明治初年の絵図を対象として算出した城下の土地利用の比率が、『府県地租改正紀要』の記載と殆ど変わらないことに驚かされた。改めてこの資料の正確さが証明されたわけであるが、これを用いて城下の比率を論じた矢守一彦氏の業績もまたその価値を高めるといえよう。その他、GIS分析により都市域の拡大などが指摘されているが、「おわりに」を読んでもGIS分析の成果が明確に示されていないなど、新たな分析手段の有効性を高らかに謳うとまでは至っていない様で少し残念である。しかし詳細な分析を行っており今後の成果に期待が持たれる。

第5章は、犬山城下町を事例に、城下絵図の系譜と変遷を明らかにしたもので、絵図の記載を元に城下町の景観変遷について論じている。冒頭で犬山城下の特徴を述べ、「城主の政治的立場や意向に左右されやすい『政治都市』」という位置づけをされている点が印象に残った。こうした視点は他の城下町にも適用でき、類型化できる可能性があるだろう。犬山の城下絵図については概

ね近世前半に集中しており、当該期における城郭・城下町の建設との関わりからこれを説明されている。その他にも随所に重要な指摘がなされている。景観の変遷については、主に矢守氏の研究の成果に則って検討を行っているが、総構の機能をどのように捉えるのか、名古屋口の存在も踏まえてもう少し具体的に示して頂ければ良かったように思う。

第6章は、新発田城下町を事例に、城下絵図の比較検討と絵図の精度についてのGIS分析を行ったものである。特に城下町全体を描いた絵図には、正保城絵図系と「一歩一間歩詰」系の二種類が存在するが、前者は歪みが大きい上に地割の改変もあって現在地との対照が難しいことから、主に後者を用いてGIS分析が行われている。絵図の各地点における歪みの抽出からは、各地区の境界付近にそれが集中することが明らかになるが、武家地と町人地とがそれぞれ別の絵図に仕立てられ、接合した際に歪みが生じたものと想定されている。こうした歪みの分析から絵図作成の過程が推測される点は、GISを用いた分析の有効性が十分に理解できる。

第7章は、地誌書や名所図会から犬山城下町の空間を論じたユニークな研究である。前半では、近世地誌書や名所図会の概要を示しデータベース化を行っている。これによると地誌書及び案内記の編纂は、対象地域や内容を踏まえ概ね四期に区分することができる。筆者はこれらの多くが旧国域を対象としている点を指摘されているが、評者は逆に十八世紀末から旧国域ではないタイプの地誌が増えてくることの方に興味を覚えた。道、河川、スポット、地域などの地誌の登場が、行動文化や地域アイデンティティの成熟を物語っているように思える。城下町の地誌というものもこうした背景から捉えてみる必要があるのではないだろうか。後半は、『犬山視聞図会』を中心に、犬山城下の場所や風景がデータベース化され、その分布傾向が示される。GISを前面に出した分析がなされているわけではないが、城下絵図では明らかにできない城下町空間の広がりやその実態を知ることができる。評者が主張している「地域として城下町」を捉えるひとつの方法としても有効であるように思う。③

第Ⅱ部になる第8章及び9章は、佐賀城下町を事例に武家地及び町屋地区の空間構成及びその変容についてGIS分析を行った研究である。第8章の前半は、佐賀城下町の成立過程から城下町プランについての位置づけを行い、その後の変容について城下絵図を用いて検討している。さらにGIS化に用いられる屋敷帳の史料批判やデータベースの説明を経て、後半のGIS分析が行われるが、ここでは武家地における流動性の高さ、とりわけ大組が地域ごとのまとまりを持たない点が指摘され、下級武士や職人屋敷の城下外縁部における立地傾向などについて検討されている。特に鬼丸地区において藩の軍制改革に伴い武家地の再編がみられる点は、幕末の下総佐倉でも同様の現象が確認できて興味深い。④

第9章は、有名な「竈帳」の分析を通じて、居住者のデータベース化及びGIS地図の作成を行い、近世後期における町屋地区の実態を明らかにしたものである。特に紺屋町を対象に居住者や景観の変化を比較検討している。その結果、屋敷地区の細分化や裏町の形成が確認されたほか、佐賀城下町の特徴である下級武士の混住状態については、身分よりも職業が選好された可能性を

指摘している。評者の立場からすれば、こうした傾向を佐賀の特殊性とみるのか、それとも一般化できるものとみるのか、そのあたりについての見解を示して欲しかった。また、ＧＩＳを用いた地図化によるメリットについては理解できるものの、ＧＩＳを用いた分析という点ではさらなる可能性を提示して欲しかった様に思う。

第10章は、和歌山城下町を対象に武家屋敷を含む都市構造の検討と、「身分制的空間編制」原理の維持についての考察を行ったものである。前半は和歌山城下町の概要を示し、浅野期の原形態とその後の変化について検討し、複数のセクターによって階層化される構造と、多核的な構造とがみられることを指摘している。また、武家屋敷地の変化を知るために城下町絵図を選別し、画期となる絵図の景観年代などを詳細に検討している。ここでは絵図を分析する上での問題点がいくつか挙げられているが、景観年代が齟齬する例を集めてパターン化して示すといったことも有効であったかもしれない。後半は、武家屋敷の移動及び拡充の問題を中心に検討がなされ、また武家屋敷の面積をランク別に整理し、その空間分布を動態的に示すなど、詳細な分析がなされている。そうして「身分制的な空間編制」原理の維持については、屋敷の移動と拡充という二つの方法で対応したと結論付けられている。しかしながら、前者については「身分制的な空間編制」を維持するものとして理解できるとしても、後者についてはこの空間原理に矛盾を生じさせるものとして理解するべきであり、これを維持する方法として捉えることは適当ではない様にも思われる。

第11章は、水戸城下町における武家屋敷の禄高別分布を、十七世紀中頃と十九世紀中頃とで比較した研究である。前半は、水戸城下町の概要を示し、ＧＩＳ分析を行う城下絵図の選別などがなされている。ここでなぜか千波湖の規模についての検討がなされるが、絵図の注記とＧＩＳ分析による結果を比較し、絵図そのものの精度について検討がなされている。後半は、城下復原を行うためのＧＩＳ化の手順やその問題点などが具体的に述べられ、さらに拝領屋敷の属性情報として用いる家譜についての概要が示されている。最後にＧＩＳ分析による考察がなされ、十七世紀中頃には禄高に応じた屋敷割りが維持されているが、十九世紀中頃には、幕末における藩の事情なども関係し、屋敷割りの秩序が変容していた様子が明らかにされている。

第12章は、米沢城下町を対象に家臣の屋敷配置について分析を行ったものである。構成は概ね第11章と同様であるが、城下屋敷と城下外縁部の原方集落とを比較している点に特徴がある。ＧＩＳ分析の結果からは、武家屋敷地において番組ごとの集住がみられないことと、城下と原方集落の双方で空き家が増加し、屋敷地の低密度化が進行したことが指摘されている。とりわけ後者の理由については領内人口の減少との関係で説明されているが、家臣の人数は通常は藩の石高に比例するのであり、これが領内人口と比例するのであれば、その理由についても示して頂きたかった。

第13章は、十九世紀末における関東の天然痘罹患者の割合から、都市村落間における格差の問題について、府県統計書などを用いて分析を行ったものである。その結果、旧城下町である川越や小田原では、罹患率において都市村落間の格差が認められている。但し、この結果が旧城下町であることと本質的に関係するかにつ

いてはさらなる検討が必要であろう。本章は本書の趣旨からしてみれば明らかに異質な内容であるが、歴史地理学におけるＧＩＳ分析の方法を提示するものとして本書に収められた意義は少なくないように思う。

以上、各章の内容と若干の感想を述べてきたが、つぎに本書を通じて感じた問題点を二つだけ挙げて、書評の責を塞ぐことにしたい。

まず一つは、地理学において城下町研究がこれまで追求してきた、都市住民の「身分」に関する問題である。評者は「身分」という場合には、階級身分と職能身分とを分けて捉える必要があるように考えている。そうした上で住民の空間居住分布を分析する場合には、どちらの性質が本質的かということを考えていくことが重要であると認識している。本書の各章では、概ね階級身分から地域区分や都市構造を捉えようとする立場で論じられているが、これは矢守一彦氏をはじめとする、城下町を「身分制都市」として捉える従来からの考え方を基本的には踏襲したものであり、身分制的な空間規範の変容を捉えることで先行研究を超えようとしたものといえる。本書では第4～5章、第8～12章においてそうした立場がとられており、これは近年における地理学分野からの城下町研究にみられる傾向である。しかしながら、そうした理念的な都市像をイメージしながらも具体的な分析で見えてくるのは、職業や役職の違いにより異なる立地パターンを示すという極めて機能的な実態である。例えば第9章では、屋敷帳に記載がある手明鑓、足軽、歩行、大工棟梁、職人、又内、社人は、それぞれに居住のパターンにおいて職能的な個性がみられるが、これを階級的な身分で捉えてしまうと極めて平均的な結果しか見えてこないのであり、結局は身分制の同心円的な空間理解に終始してしまうのである。こうした点に対し、評者は職能的及び機能的な居住立地という視点こそが重要であると考えているが[5]、身分制による限界を認めつつも近世都市の合理的な性質を評価することが次の段階では必要ではないだろうか。

二点目として、ＧＩＳ分析の成果についてである。本書では、歴史地理学研究におけるＧＩＳの導入を積極的に行い、新たな研究方法を見出そうとする意欲的な試みであったと評価できる。一方で、本書はまさにその有効性が試される内容であったが、果たして従来の研究方法をどれだけ前進させたといえるだろうか。この問いの答えを象徴的に示しているのが第10章である。本章は、特にＧＩＳ分析を行ったものではなく、従来の城下町研究における方法の延長として位置付けられるものであるが、その詳細な分析や問題意識は、他のＧＩＳ分析を用いた論考を凌ぐものといえる。こうした従来の研究方法と、ＧＩＳを用いた研究とを比較した場合に、そこに大きな違いが感じられないのはどういうことだろうか。それは恐らく、都市研究そのものに対する問題意識に原因がある様に思われる。研究目的や問題関心が深められていなければ、いかに技術を駆使しても自ずとそこから導き出される結論は陳腐なものにならざるを得ない。ＧＩＳを使用することが目的化していなかっただろうか。技術の進歩が学問の発展に結びつかなければ意味がない。そうした問題意識が果たして共有されていただろうか。原点に戻りそうした点をもう一度踏まえることが何より重要であると思われる。

他方、地理情報のＧＩＳ化は、研究者における情報公開や、第12章で指摘されているような観光や教育現場での活用といった面で大いに期待される。本書ではそうした試みについても紹介されており、今後のデータ整備とその活用に道筋をつけ、さらなる成果を重ねていって頂きたい。

以上、本書の内容を簡単に紹介し、それに若干の感想を述べ、評者なりの本書における課題を挙げてきた。各章における研究成果を正しく評価し尽くしていない点は、もとより評者の力量不足によるものであり、ご寛恕いただきたい。最後に、新たな課題と問題意識を踏まえ、本書の続編が十年二十年先に残るものとして編まれることを大いに期待したい。

① 渡辺康代（二〇一九）「〈書評〉平井松午編『近世城下絵図の景観分析・ＧＩＳ分析』」『歴史地理学』六一－四。

② 拙稿（二〇〇六）「二王座村絵図にみる臼杵城下の景観と地域構成」『地図』四四－三。

③ 拙稿（二〇一八）「『城下町』用語とその概念の変遷」『國學院雑誌』一一九－三。

④ 拙稿（二〇一九）「絵図からみた城下町佐倉」『佐倉市史研究』三二。

⑤ 拙稿（二〇一六）「久世氏入部期における関宿城総構内の屋敷配置と空間構成―『世喜宿城之図』の検討を通じて―」『野田市史研究』二六。

（Ｂ５判　二〇一九年三月　古今書院　二八一頁　税別八四〇〇円）

（國學院大學兼任講師）